

02 野田村シャレットワークショップ

『村に寄り添い、村民と共に野田村の将来像を考える』

■活動地域

岩手県九戸郡野田村

■活動期間

2011年7月～継続中

■活動体制

工学院大学 野澤研究室／
八戸工業専門学校河村研究室／
東京都立大学玉川研究室・市古研究室

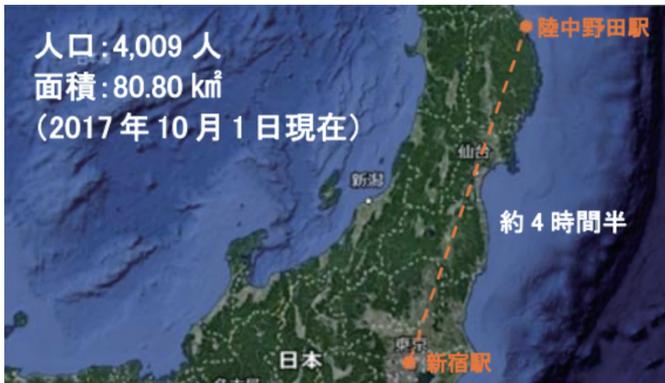
■活動キーワード

東日本大震災／復興まちづくり／地方創生／
民泊／交流

■2020年度活動メンバー

M2：宮崎裕子
B4：奥津友理香、田苗和倫
B3：桑嶋有紀、佐藤まなみ、清水蓮平

対象地の概要



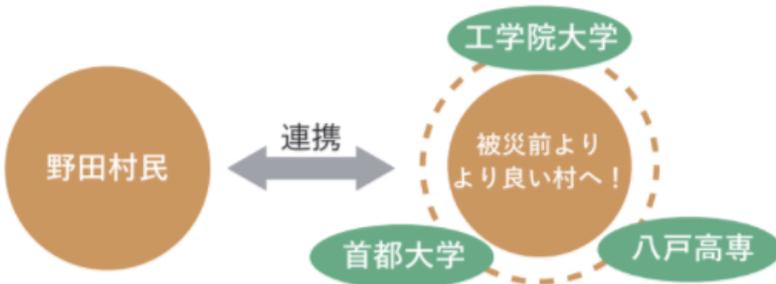
岩手県北部にある、太平洋に面した小さな村である。長くゆるやかな砂浜が続く「十府ヶ浦海岸」や清流「安家川」、「和佐羅比山」など豊かな自然に恵まれている。安家川の流れる下安家地区には全国有数の「サケ・マスふ化場」があり、特産品には野田湾で採れる「ホタテ」や「ワカメ」などの海の幸、「ほうれん草」、「食用菊」や生産量日本一を誇る「山ぶどう」、海水を数日間煮詰めて作る「のだ塩」などが有名である。

活動経緯

2011年に起こった東日本大震災において、岩手県野田村では、津波によって村内の住家の1/3が被害を受け、中心市街地や漁港なども広域に渡って甚大な被害を受けた。2011年度より八戸高専の河村研究室、東京都立大学の玉川研究室と市古研究室、工学院大学の野澤研究室、計4つの研究室が主体となって、復興まちづくりを提案するCWSを行ってきた。この4つの研究室では都市や建築について勉強しており、その知識を活かしてまちづくりの提案を行っている。

これまでの活動

2011年度からCWS形式で復興まちづくりの提案を行ってきた。2013年度から、より村に寄り添った提案を行うために、夏に生業・民泊体験を行い、半年間かけて提案をまとめる形式へ変化し、この形式を引き継いで活動を行ってきた。村民と学生との距離を縮め、村に根付く提案を目指している。



- 2011 | 2012 ▶ 震災直後の野田村において、商店街、参道や高台団地、中心市街地、防潮堤など村のハード面での復興をメインとした提案を行った。
- 2013 | 2017 ▶ ハード面での復興が進み、村での生業体験や民泊などを取り入れ始めた。村での体験や、学生と村民の交流を深めることを目的とし、提案を行ってきた。
- 2018 ▶ 2013年度からの形式を引き継ぎながら、2018年度は村からの依頼を受け、野田小学校の改築をテーマに挙げたワークショップを行った。
- 2019 ▶ 村の伝統行事に参加し、村への理解と村民との交流を深めた。その後、写真を使ったワークショップを行い、村民の思い出を引き出しながら村の将来について考えた。



今年度の活動内容

今年の活動はコロナ禍の影響により野田村へ実際に足を運んでのフィールドワークを行うことが困難な状況で、野田村 CWS をどのように継続させていくかという議論から始まった。6月から9月にかけてオンラインのミーティングを計4回実施し、議論を行った。野田村 CWS の10年目の節目ということもあり、今までの功績を振り返りしながら、今後どのような形で残していくか検討することを目的とし、残し方のひとつとして参加型ワークショップを行う際に使用するツールの案を各大学の研究室ごとに作成し、共有をした。

そのなかでできたフォトランゲージについては、ツールとしての理解を深めるために、研究室ごとに実験的なグループワークも行った。現地に行けない状況を活かしながらも、今後の活動に活かすことのできるようなツールを作成することができた。村の将来について考えながら、これまで行ってきた活動についても振り返ることができたため、来年度の活動に引き継いでいく。

オンラインミーティング

例年とは異なる状況下であったため、オンラインでのミーティングを行った。工学院大学、東京都立大学、八戸工業専門学校、京都大学の4大学の教授と学生が集い開催された。野田村 CWS の功績の残し方について、各研究室ごとにミーティングを重ね、案を出し合い共有した。パンフレットやオンライン上での残し方など様々な提案がなされ、これまでの野田村 CWS の遍歴を遡りながら、フォトランゲージのツールとして利用できる素材を見つけ、実際にツールの作成を行った。



フォトランゲージグループワーク

これまでの10年間で行ってきた野田村 CWS の活動についての功績の残し方のひとつとして提案された『フォトランゲージ』をツールとして用いた実験的なグループワークを研究室ごとに行った。野澤研究室からは4名が参加し、右の写真を含めた野田村の漁業に関する3枚の写真を使い行われた。写真を見てわかったことや抱いた疑問など、個人で意見を出した後、共有をした。実際に行ったことのない学生も、日常を切り取ったような写真から、野田村の漁業を想像し、理解を深めることができた。



来年度の活動予定

オンラインで実施した今年の活動を、新型コロナウイルスの終息後にどのように活かしていくかを検討する。これまでの10年間で野田村と築いてきた関係性を絶やすことなく交流を継続させていくための新たな”形”や、10年間の活動の発信方法を模索していくことを目的とし、引き続き活動を継続していく。

また、参加型ワークショップを行う際に使用する、【村の将来の意識化】を形にするためのツールとして今年度作成したフォトランゲージの活用方法についても引き続き模索し、今後の活動でどのように用いていけるかの検討を続けていく。